

## 卷頭言

# 中国最古の医論

茨城大学名誉教授 真柳 誠

九月二十七日に千葉大で開催された第三〇回の漢方治療研究会はコロナ禍の中、ウェブも併用して大変新鮮だった。とくに会頭指定のデイベートは漢方医学と中医学の相違を、あえて際立たせた三論点について綿密なシナリオに基づき討議していた。演者各位の議論も理解しやすく、とても有意義だったと思う。ただし痛感したのは、双方ともに論拠があつて一つの結論に到らない、という医論の宿命だった。そこで「病膏肓」の典故『春秋左伝』にみえる中国最古の医論について、最近考えたことを述べてみたい。

『左伝』の昭公元年（前五四一）には、晋の平公の病に隣国の秦の景公が医和を派遣し、その医和の語った病因論がある。すなわち、平公の病は鬼神や飲食によるのではない。昼夜の別もない過度な房事で精神が惑乱し、

蠱疾のようになっていいる。このままでは治らないと判断し、以下のように論じて平公を説得しようとした。

天有六氣、降生五味、発為五色、徴為五声。淫生六疾。六氣曰陰陽風雨晦明也。分為四時、序為五節、過則為菑。陰淫寒疾、陽淫熱疾、風淫末疾、雨淫腹疾、晦淫惑疾、明淫心疾。

天に六氣あり、（地に）降りて五味を生じ、発して五色をなし、徴して五声をなす。（天の六氣が人に）淫（過）ぐれば六疾を生ず。六氣は、いわく陰・陽・風・雨・晦・明なり。わかれて四時（四季）をなし、序（ついで）で五節（春・夏・季夏・秋・冬）をなし、（人に）淫ぐれば則ち菑（災）をなす。陰淫ぐれば寒をやみ、陽淫ぐれば熱をやみ、風淫ぐれば末（四肢）をやみ、雨淫ぐれば腹をやみ、晦（夜）淫ぐれば惑（惑乱）をやみ、明（昼）淫ぐれば心（心労）をやむ。

この医和の病因論にはさまざまなロジックが混在している。平公の病が鬼神や飲食によるのではないと診断したのは、両者が当時の主要な病因論だったことを示唆しよう。房事過多を精神惑乱の原因と判断したのは、当時の諸侯がおおく耽溺していたからにはかならない。それゆえ平公に「晦淫惑疾（夜が過ぎると惑乱病になる）」と

説いたのだった。病因の内因・外因・不内外因は南宋の『三因方』（一一七四）から強調され、飲食と房事は不内外因とされる。鬼神は外因にあたるかもしれないが、後世の概念で解釈しても意義はない。

医和が説いた冒頭の「天有六氣」は、気がすべてを媒介するというシステム論、すなわち氣一元思想で、これが第一の論理として全文に通底している。また天の六氣が地に降下して五味などをなすので、天地という陰陽説が第二の論理だった。天が六で地が五という数は、『左伝』と編者が同じとされる『国語』周語下の「天六地五、数之常也」と合致する。ゆえに医和のいう「六氣・五味」などの背景には、当時の術数家に流行したロジックがある。さらに第三の論理は五味・五色・五声などの五行説だった。しかも戦国時代に成立した五行説が医和の論説にあることは、『左伝』の戦国期成書説を傍証する。

第四の論理は天人相関説で、「天有六氣、……（それが人に）淫生六疾」に明示されていた。かつ天地に人が加わるため、『易経』以来の天地人の三才説も第五の論理とみなせよう。つまり以上には氣一元の一、陰陽の二、三才の三、四時の四、五味の五、六氣の六があり、その関連から論説している。まさに数の神秘性とパワーから

述べており、中国固有の数理哲学たる術数学の如実な体現だった。あるいは、術数学Ⅱ占術を応用した医論ともいえる。

なお天の六氣が過度のときにだけ人は六疾になるというので、六氣はかならずしも後世の外邪というわけではない。そして六氣過度による六疾の発生は、陰陽説と天人相関説で整理されていた。すなわち、「陰淫→寒疾」「雨淫→腹疾」「晦淫→惑疾」が天の陰氣過度による発病、「陽淫→熱疾」「風淫→末疾」「明淫→心疾」が天の陽氣過度による発病だという。

これら論理を盛り込んだ医和の説は、平公の「惑疾」という病症から「晦淫」という病因を推定し、「このままでは治らない」と予後まで診断する。こうして医和は病症観察による判断をロジカルに述べており、それが当時の名医の所以でもあった。後世の中国医学で精緻になるロジックの嚆矢が、医和の病因論にみえることは注目している。とはいえ、同類のロジックは世界の伝統医学に存在する。医和の論はあくまでも中国医学思想の原初とみるべきであり、中国医学理論（セオリー）のスタートなどと評すべきではなからう。